わくわくWAKUWAKUYA 広報
12 Dec. 2020
No.785

コロナ禍で輝きを増す金のいぶき―

－特　集－

さらなる
かがやきを
まとう

「金のいぶき」

新型コロナウイルス感染症の影響により、全国的に外食産業を中心に米の需要が下降する中、平成29年から日本初の産金地にふさわしいブランド米として栽培が強化されてきた涌谷町の「金のいぶき」は、現代の金としての価値を高め、まさに黄金の輝きを放ち始めています。ブランド化4年目にして飛躍する「金のいぶき」に迫ります。

コロナ禍であっても
市場が求める「金のいぶき」

令和2年の稲作は、新型コロナウイルス感染症の影響で、「ひとめぼれ」をはじめ、新品種「だて正夢」など主力5品種の買い取りの概算金は下落。他県においても同様の状況にある中で、涌谷町がブランド化を進める「金のいぶき」は買い取り価格が上昇しました。

GABAやビタミンE、食物繊維などが豊富な上に食べやすい玄米食専用品種「金のいぶき」は、一般的な主食米とは一線を画した健康食品としての地位を確立し、増大する健康志向の需要にマッチ。その一方で、栽培に手がかかるため全国的に産地が減少しているため、宮城県内で唯一「金のいぶき」は、買い取り価格が上昇しています。

ブランド化4年目を迎えた涌谷町では、12軒の経営体で13.5ヘクタールに作付けし、10アールあたり平均492kgを収穫。年々平均収穫量は増え、初年度の平均438kgに比べ約60kg多く収穫しており、ブランド化とともに狙う稲作生産者の所得向上にも追い風が吹いています。

なぜ収穫量が増えるのか

涌谷町でブランド化2年目の平成30年に、初年度よりも多い収量を目指して基肥（もとごえ）を増やしたところ、全生産者の金のいぶきが倒伏。さらに、倒伏による発芽も起き、収量が激減する上に等級も下がる事態になりました。

翌令和元年は、その結果を踏まえ、肥料設計を検討。宮城県農業改良普及センターと連携し、基肥ではなく追肥をするなどといったマニュアルに沿った栽培をしたところ、収量・品質がともに安定しました。今年は、台風も少なく天候が稲作には適したものとなり、さらに収量が安定。

「金のいぶき」を担当する涌谷町農林振興課の藤崎主任主査は、「出穂が遅いためカメムシ被害を受けやすく、収穫時期も遅く、手間はかかるが、基本に忠実な作り方をすれば、きちんと収穫できる米」と話します。

来年5年目を迎えるブランド化は、生産者と農協、行政が一体となり、試行錯誤してきたことで、品質を安定したまま増産する次のステージに進もうとしています。

生産者インタビュー

「栽培する稲が全部倒れた姿を見て、『そうきたか。この米、難しいなぁ』と思った」と振り返る生産者の一人、土生木勝洋（ぶきかつひろ）さん。

土生木さんは、ブランド化2年目から参画し、初年度の収穫量は、10アールあたり約300kg。「当初は収入には結びつかなかったが、一度取り組んだからには、この地に合った『金のいぶき』を作ろう、倒さない工夫をしようと次を考えた」と生産者魂に火がつきました。

土生木さんが取り組んだ最初の年、余った苗を別のほ場に植えたものが、他とは違った肥料設計だったことで、倒伏を免れたことを足掛かりに、他の生産者や農協、普及センターと研究を重ね、涌谷町の栽培マニュアルの基礎を築いてきました。「日常的な生産者同士の情報交換や現地検討会の成果」と話す土生木さんの令和2年の収穫量は10アールあたり約510kg。

また、周囲から聞こえてくる「金のいぶき」にかかわる声から地元への定着も実感しています。

「市場が求める『金のいぶき』なら、産地涌谷町としての品質を保証しながら、日本の生産量トップを目指そう」と将来を見据えます。

《写真解説》①平成30年に倒伏気味の金のいぶきを慎重に刈り取る土生木さん②基調色が黄色から金色になり文化庁日本遺産のロゴが印刷された新パッケージ③涌谷産ブランド米として地元アルプスアルパイン涌谷工場の社員食堂で提供される金のいぶき④倒伏がない今年の収穫風景

東大寺に涌谷町の現代の金を献納するために

「金のいぶき」

《写真解説》
①②収穫した稲穂を天高く掲げて喜びを全身で表現③手刈りとともに伝統的な穂仁王（ほにおほんにょ）による天日干しも体験④稲作の苦労を実感するための落ち穂拾いも体験

箟岳白山小学校で2年目の「金のいぶき」栽培

昨年度に続き今年度も、箟岳白山小学校の5年生児童が「金のいぶき」の栽培に取り組みました。

田植えが行われた5月は、新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休業となっていたため、児童が田植えをすることはかないませんでした。しかし、「金のいぶき」の生産者の土生木勝洋さんに、田植えから収穫まで管理していただいたおかげで、実りの秋を無事迎えられ、10月6日（火）に稲刈りとなりました。

例年は、地域の老人会の皆さんに指導してもらいながらの稲刈りですが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、少人数での実施となりましたが、鎌を使った手刈りや穂仁王による天日干し、最後の一粒まで大切にする落ち穂拾いなど、昔ながらの伝統的な農作業を体験。実際に手刈りをした児童もいれば、初めての体験という児童もいましたが、手際よく覚えてサクサクと刈り取っていきました。この「金のいぶき」の栽培によって、基幹産業の農業に加えて、日本遺産にも認定された日本初の産金地であり、東大寺の大仏さまに金を献納した歴史を学習するとともに、郷土への誇りを醸成する機会となっています。

世界遺産・国宝にはためく誇りと生産者としての思い

本来であれば、今年度も「金のいぶき」の生産者とともに、東大寺大仏殿への「金のいぶき」の献納に参列する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止せざるを得ませんでした。それでも、東大寺に「金のいぶき」を献納するため栽培しているという思いを届けたいと児童が発案し、一人一人の「金のいぶき」の生産者としてのメッセージを書いたフラッグを作成。

作成したフラッグは、11月3日（火）の、「金のいぶき」を東大寺大仏殿に献納する平城京天平祭東大寺参詣当日、世界遺産であり、国宝建造物の東大寺大仏殿内に、東大寺狭川普文（さがわふもん）第223世別當（べっとう）のお心遣いにより、涌谷町の現代の金「金のいぶき」とともに掲げていただきました。

そして、東大寺大仏殿・盧舎那仏のもとへ

《写真解説》⑤特別な時にしか開かない中門を通り大仏殿へ運ばれる⑥聖武天皇役の加藤雅也さん⑦大仏殿正面での法要⑧⑨ミス奈良が演じる華やかな光明皇后と女官たち⑩⑪稲穂と俵で運びPR

新型コロナの終息も願い

11月3日(火)に、奈良市で行われた平城京天平祭東大寺参詣に併せて、涌谷町から「金のいぶき」生産者の及川秀雄さん、土生木勝洋さん、及川達也さんが参列し、「金のいぶき」を献納しました。

例年よりも規模を縮小した開催となりましたが、聖武天皇役を奈良市観光特別大使で俳優の加藤雅也さんが今年も務め、天平衣装をまとった光明皇后や女官らが華やかに大仏殿まで練り歩きました。

感染拡大防止のため、今年は大仏殿正面の屋外で、東大寺狭川別當をはじめとした皆さまによって法要が執り行われ、聖武天皇と光明皇后を供養しながら、国家安寧を願い造立された盧舎那仏に、一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願いました。

コロナ禍でも躍動！小学校の運動会

新型コロナウイルス感染症の影響によって、秋の開催となった小学校の運動会。いつもとは違う時期に、いつもと違う縮小した規模のプログラムでの開催となりましたが、徒競走や団体競技など、児童の皆さんは一生懸命に取り組みました。

《涌谷第一小学校の運動会》

天気が目まぐるしく変わる中でも、全校児童が一丸となり『涌一魂』を披露した涌谷第一小学校の運動会。

①史料館を望む校庭を勇ましく駆ける②掛け声に合わせ一丸となって綱を引く③相手のしっぽを手に入れるため必死な表情に④1位でゴールテープを切る喜びが顔に浮かぶ⑤声援を背に駆け抜ける⑥走る姿が力強い6年生⑦コンクールに向けて磨いてきた演奏を奏でた涌谷第一小学校マーチングバンド

⑧

⑨

⑪

⑩

⑫

《月将館小学校の運動会》

校庭の状態回復のため、当初の予定の3日後に順延した月将館小学校では、雲一つない穏やかな快晴の下で開催されました。

⑧1位でゴールテープを切り笑顔がはじける⑨アンコールがかかった1・2年生のドラえもんダンス⑩ゴール直前の最終コーナーでのし烈なトップ争い⑪1位だけが許される満足の表情⑫ゴールラインを切るまでもつれた5・6年生の団体競技

《箆岳白山小学校の運動会》

前日までの雨の影響で風が強かったものの、土を入れるなどの作業を早朝から行い、ぬかるみを整備したことで、青空の下、無事に当初の予定どおりの日程で開催できた箆岳白山小学校。

⑬二人のチームワークが試された大玉転がし⑭青空の箆岳山ろくに響いた1年生の誓いの言葉⑮音楽に合わせてコミカルな腰ふりを披露したダンス⑯気持ちもバトンと一緒に仲間に託すリレー⑰1位の喜びを高々と掲げる万歳とはじける笑顔で表現

⑰

⑭

⑬

⑯

⑮

涌谷町名誉町民
久道 茂氏が御逝去

久道茂氏のこれまでの御功績

涌谷町字本町で生まれた氏は、東北大学卒業後、さまざまな研究を行い、昭和56年東北大学医学部教授に就任。その後、医学部長時代に厚生省現厚生労働省の研究班のトップとして、各種がんの検診に関する世界中の研究論文を詳細に検討されました。平成10年にまとめたその報告書は、科学的根拠に基づいた検診の有効性を明らかにし、今日のがん検診の明確な指針となり、平成18年に制定された「がん対策基本法」および平成19年に策定された「がん対策推進基本計画」でもそのことが強調されるなど、そのきっかけを築きました。

また、国および地方の公衆衛生行政における活動に尽力し、特に、公衆衛生審議会や厚生科学審議会の両会長時代は、「結核緊急事態宣言」「がん検診の老人保健法への法制化」「健康日本」「特定健診の導入」などの注目すべき問題解決のための提言・答申に務め、生活習慣病全般に関する厚生労働省の各種委員会の委員として、国の重要な意思決定に参画。

宮城県では、平成14年から宮城県病院事業管理者および宮城県がんセンター総長を務め、がん発生状況や医療実態を把握して、医療向上に役立てる宮城県の地域がん登録を利用した大規模疫学研究を進め、平成19年からは、第5代宮城県対がん協会会長として、がん予防対策の調査研究、宮城県地域がん登録、医療従事者および県民一般を対象としたがん予防と生活習慣に関する普及啓発活動、がん患者・家族の相談対応など、啓発から事後管理まで一貫した検診体系で行われる質の高い「宮城方式」を基本としてがん検診を実施する民間におけるがん征圧推進団体の長として、長年にわたってがんの予防と検診の普及に大きく貢献されてきました。

さらに、涌谷町に対しては、氏は昭和63年に事業採択された自治省(現総務省)のリーディングプロジェクト事業「涌谷町健康と福祉の丘のあるまちづくり事業」において、現在国が進めている「地域包括ケアシステム」の前身ともいえる町が目指す保健・医療・福祉を一体的に行う「町民医療福祉センターシステム構想」の実現にあたり、準備の段階からオープン後も東北大学教授としての高い見識からの指導・助言を行い、町の最重要課題であった病院問題の解決や現在行われている疾病予防のためのさまざまな健康づくり事業など、町民の健康保持と保健・福祉の向上に寄与されてきました。

そういったさまざまな功績が評価され、平成23年に日本医師会優功賞、平成29年に朝日がん大賞を受賞されました。

このような氏の功績には町民が等しく敬意を表するものであるとして、平成30年10月23日に、8人目の涌谷町名誉町民として推戴しました。

久道氏のこれまでの御功績に対し深甚なる敬意と感謝を申し上げ、哀悼の意を表します。